

「はい、これがテレビです。」

有馬神社の母屋にて、ベレー帽に戦前の探偵が好みそうなマントを羽織った少女がプラズマテレビを持ってきていた。

「うわあ...これがちまたで噂のテレビなんだね。」

白い長い髪が映える少女 服装は巫女服 が物珍しそうにそのテレビを見る。

「これで、電源をつなげれば映るのですか？」

神主の衣装に身をつつんだ成年があきらかにそこだけ工事しましたよ、といわんばかりの壁のコンセントにプラグを差し込む。

「ああ、まだ映りませんよ～。次はチャンネル合せをしていかないとダメなんです。」

「いろいろと大変なのねえ...」

青年と二人の少女がテレビをまえにあーだのこーだのしているのを微笑ましく眺めている日本撫子というのが似合いそうな巫女が素直な感想を述べる。

時空融合から1年がたって...人生初めてのテレビの設置。

正直、かなり特異な環境下の風景である。

まあ、それもそのはずでこの有馬神社とその神社がある村全体が大正時代からの融合だったのである。そして、数少ない、電線がまったく通ってなかった地域でもあった。

「双葉ちゃん。こっちの網がかかったのは何？」

「あ、それは...どるび～ぷろろじっくさうんど、っていう臨場感を増す音響用のスピーカー...発声機械なの。」

巫女の問いに答える探偵風味少女。双葉という名前の探偵風味少女はどうやら横文字にかなりなれているらしい。

「ふうん...。らじお、っていうのとどう違うの？ あれも音声だけだよ？」

「ああ、これはこのテレビに映る映像と一緒に送られてくる音声を再生するものなんです。えーと...説明するのもかなりしんどいのでとりあえず、テレビが見えて、音声が届くようになるまで質問は後にしてもらえないかな...？」

「柚鈴、双葉ちゃんが困ってます。ここは彼女に任せましょう。」

「うーん、悠志郎さんがそういうのなら...」

白髪の巫女少女が頷く。配線関係で双葉が格闘している間、神社の住人3名は卓袱台を囲んでゆっくりとお茶をしている。

「でも、幸野さん。テレビをいただけるなんて、どう、お礼をいえばいいか...」

「お礼なんていりませんよ、鈴香さん。これはお爺さんにとりついた悪霊退治の正統な代価なんですから。」

「そうだよ、お姉ちゃん。お礼をゆうなら私だよ～」

「ま、言うようになったわね...柚鈴。」

双葉は音声関係の配線も終わらせ、卓袱台に戻ってくる。柚鈴が急須の茶葉を交換して湯のみに新茶を注ぐ。

「はい、お疲れ。双葉ちゃん。」

「ありがとう。柚鈴ちゃん。じゃあ、あとはチャンネル合わせだけだね。新聞のテレビ欄持ってきてくれませんか？」

双葉の問い掛けに...一同凍りつく。

「...あの？」

「あー、ごめんなさい。新聞紙、今とってないの。時空融合時のごたごたで出費を押えた時に...新規加入してなくて。」

この村にあった新聞関係のは時空融合で消えたため新しい新聞社と新規契約しなければならなかったのである。

「...えーと、この一年、すごい環境だったんですね。というか...鈴香さん、なんでとらなかつたの？」

双葉が年上のほうの巫女に問い掛ける。

「ほら...月『3000円』とか、まだ相場に慣れていない頃にいわれたじゃない...それで...」

大正時代の感覚で計算してしまったわけである。

「...鈴香さん...」

「それに、ねえ？」

鈴香はいきなり柚鈴たちの方に視線を移す。

「案外、新聞無くてもどうにかなるものだし...」

「鈴香さん...。どうにかなるといって、私たちは置いていかれていると考えるべきでは...？」

「まあ、生活できてるんだから気にしないの！」

鈴香はバンと卓袱台を叩く。

「...まあ、たぶんあたしの家とかわんないと思いますので...それでやってみますね。」

双葉は設定をしていく。するとNHKが画像に映る。音声と共に。

「わあ...双葉ちゃんのところで何度かみてるけど...ついにここでもテレビ見れるんだねえ...」

柚鈴がそうしんみりと呟いた時に、何処からとも無く声がする。

「ああ、私にも見せて見せて～～！」

柚鈴の胸元あたりから聞こえてくる。

「あ、美月...ごめんね。」

ごそごそと...胸元から琥珀のペンダントを引き抜く。

「はい。」

「わあ～...すごいね～。画面大きいし。」

そしてそのペンダントからちっちゃなお人形サイズの少女　少々手足が短くデフォルメされているが　が出てきて、感想を率直に述べる。

「40インチだからね。」

この居間にいるメンバーは誰一人として彼女に驚かない。つまり、これが日常のようだ。

「ところで...これ、なにをやってるのかしら？」

NHKに映っていたのは東京都都区の映像だった。

雪が降る中、妖精ピクシーをかいぐりしてる少女が映っている。

「...これ、私と同じ...サイズ？」

美月はそう、誰にととも無く訊ねる。全員、頷くだけだった。

そして、その画面とそして報道の音声に耳目を傾けながら、一同の顔には深い皺が刻み込まれていく。

「...また、あまり経験したくない悲劇が繰り返されるのか...？」

青年...悠志郎の言葉はその場にいる全員に共通した思いだった。

人と魔が相容れることができるのか。特に生存条件 簡潔に言えば、食事などが完全に異なる者たちと。

「で、でも、今の日本連合には少数とはいえ、異星人や妖怪と呼ばれる人たちと手を取り合って生きています。」

SSFW Outside Story

新世紀アリス伝 / Face Earth

Ep02. 季節はずれの恐ろしさ

D = P A R T

Date 02.05/09(Part Start time / 14:24)

式堂兄妹が都区にたどり着いた頃には幾人かのGS稼業の人物が集まっていた。

実は今回のこの悪魔掃討作戦には美神令子をはじめとする美神美智恵と親しい人物は居ない。今回の事件をもとに「現在の民間の実力」というものを推し量ろうという意図がそこにはある。先日の事件のこともあり、神秘学方面で大きな事件が発生した場合には野におり、隠した力の持ち主が出てくることも期待されているのではあるが...まあ、そのへんは美智恵個人の意図でしかない。

もっともこの世界にでてきて半月とちょっとの式堂兄妹にそれがわかるはずは無く、ここにやってきている者たちもそこまで深く考えている人物は少数に限られる。

「...年老いた人物もいれば、若い人物もいるな...。」

式堂姉妹は決行までの間の待ち時間を使って今回の事件に参加してきているGS稼業の人物を見て回る。

そして人の動き、立ち方、そして聞き漏れる話の内容などからだいたいの実力を押し量っていく。

「兄さん、どなたが実力者だと思いますか？」

「...あその白いなんらかの式服を着込んだ女性、だろう。手にしている刀からも強い気を感じる。刹那のほうはどうだ？」

甲斐那が指摘したのは青みがかった髪的女性であった。

「私は...私たちを睨みつけているあちらの女性のほうを。場数を相当に踏んでいそうです。」

刹那の指摘した女性は...カソリック系の僧衣を来た金髪の小柄の女性。得物にトンファーを選んでいるあたりが他と違う。ちなみに鍛え上げられた体躯の少年が付き従っている。

「...なぜ、睨んでいるのでしょうか...？」

「...さて、な...」

と、ここで急遽用意された無線放送機材からチャイムがなる。そして、放送が始まった。

時刻は14:40を指し示していた。

「この緊急事態にどうもお集まりいただきありがとうございます。依頼文にて皆さんを集めさせていただいた美神美智恵です。本来ならば陣頭指揮をとるべきなのですが、政府の要請で現在、議事堂での議員や報道関係者への説明を始めとした広報業務に従事のため、不在という無礼については申しわけありません。」

ここに居るメンバーはその点にかんしては無言である。まあ、いなくても仕方ないのはわかっている、ということである。

「今回の事件はすでに報道されている部分もありますし依頼内容からもわかっておられるかと思いますが、現在帝都区にて大量の悪魔たちが騒動を起こしています。帝都区といえば帝国華撃団が有名ですが、今回はなにしろ数が多いので今回の運びとなりました。」

ここで式堂兄妹はすこし疑問の顔つきになる。二人は帝国華撃団がなんなのかを知らないなのである。

「現在判明している限り、オーク、コボルト、オーガ、巨人の4種が特に大きな騒ぎを起こしている事がわかっています。とくに体躯の大きいオーガと巨人によってすでに負傷者が出ており、市街地の破壊活動も行なわれています。彼らについては早期に発見、退治してください。」

その後、民間人を巻き込まない、救助優先といった諸注意の後に決行となった。係官から地図をもっていないGSには地図が渡され、各組(個人もいるが式堂兄妹を含め複数で

参加しているのも居る)に携帯電話が貸与される。その携帯電話にはチーム識別用の番号(短縮番号を兼ねる)が入っていた。ちなみに式堂兄妹は07と書かれている。

「その携帯は現在地の発信機にもなっています。戦闘で重傷を負ったときにSOS...999ですが...信号をだせば、他の参加者に今の現在地が発信されますので他の方たちは、救援に駆けつけてください。」

そう説明される。

一同解散して帝都区全域に散らばっている悪魔達を退治しにかかっていったが...

「その二人。」

僧衣の女性が式堂兄妹を呼び止める。

「なになかな？」

二人はその僧衣の女性とここできちんと目を合わせる。

女性はじーっ...と二人の瞳を見つめ、ほっと、安堵の息をつく。

「いや、申しわけない。何故死者がここにとってしまったものだから。」

式堂兄妹の顔に一瞬だが驚きの色がにじみ出る。

「...と、思ったが...当たらずとも遠からじ、だったか？」

「...ステイト、それは...いったい...？」

僧衣の女性に付き添っていた少年が尋ねる。

「この二人は私と似たような存在だとおもった...それでいいか？聖(ひじり)。」

「...。」

僧衣の女性と少年の間にしかわからないことなのだろう。その説明だけで聖という少年は頷く。

ただ、その言葉から式堂兄妹が多少感じ取ったことがある。

「それは...貴方が人間ではない...と取れますが。」

刹那がそれを言葉にする。

「...そうだな。私は正確に言えば人ではないのだろうな。もう長い時間をこの姿のまま生きてきたのだから。」

「...。」

「呼び止めてしまった詫び...ではないが、隠し事を明かしてしまったな。」

僧衣の女性、ステイトはそう言うと別れの礼をして立ち去った。聖もそれに続く。

「...ふむ。簡単に聞いていたが...我々よりもかわった生き様の人間がいるものだな。」

甲斐那の呟きに刹那は軽く微笑むかたちで同意した。

> Time 15:07

ふたりと別れ帝都区の奥へ侵入していく。すでに避難勧告によって人影は少ない。その少ない人影も静粛に帝都区から離れるものであった。

と、彼らの目の前に異形の姿の存在が現れる。豚の顔の亜人。オークだ。

「...あれが目標ですね。」

「らしい、な。」

甲斐那は刀の鯉口を切る。そこから抜き打ち一閃でオークの首を刎ねた。ちなみに刃先は全く触れていない。風だけで刎ね飛ばしたのである。

「...弱い。」

オークの死体は風にあおられ灰となって崩れてゆく。

「...遺体については深く考える必要性はないみたいですね。」

消えていく死体に刹那が呟いた。

二人が歩いてゆくと携帯が鳴る。内容は03チームが巨人との戦闘で重傷を負ったことだった。

「場所はどこかわかるか？」

「この携帯電話の映像と地図を重ね合わせますと...けっこう遠いですね。」

その後05...制服の女性...が救援に駆けつけたことが本人から連絡された。

と、その連絡と同時に二人は次の相手を見つけた。

犬の頭の亜人にカボチャ頭の妖怪、そして白い雪だるまな感じのゴーグルハットの子供。

まあ、順に言えば、コボルトにジャック・ランタンにジャック・フロストである。

先に攻撃してきたのはジャックランタン。

「ヒーホー...アギ！」

手にしたランタンを掲げるとそのランタンから火の球が発生、ものすごい速度で刹那の身に襲い掛かる。

刹那は片手を伸ばし手に力を込める。そして、その手で火の球を受け止める　と、火の球は爆炎をあげて四散した。

「...炎の魔法ですね。ですが、甘いとかいいようがありません。」

爆炎を含めた派手さの割に刹那は無傷。

「本当の魔法を見せて差し上げましょう...」

刹那の周囲に炎の蝶が大量に舞い飛ぶ。ジャックフロストが魔法の発動に入ったがそれよりも先に刹那の魔法の攻撃が飛ぶ。

「ゆけ、蝶よ。不浄なる者を焼き尽くせ。」

蝶はそのまま悪魔達を覆い尽くすように飛んでいき、触れたものを焼き尽くし、消えていく。

蝶の団体が消えたあとにはジャックランタンだけが残った。

「...炎の魔法を扱うだけのことはあるか。」

甲斐那はその残ったジャックランタンに向かっていっきに踏み込むと刀の一閃で両断する。

両断されたカボチャはゴロンと地面を転がり、炎上。そのまま鎮火して消え去る。

「いまのところはたいした敵ではなさそうだな。」

甲斐那の言葉のあと、遠くで雷光のような閃光が走る。

「そうですね...それよりもこの雪が気になりますね。」

刹那はそういうと呪文を唱える。寒さを防ぐ魔法、である。戦闘用ではないがこういう天候のときには役立つ。

「そうだな...只の雪ではなさそうだ。すでに積もり始めている。」

陽光の熱を浴びていたところはそうでもないが、建物の北側で昼、影になっていたところなどは薄く白いものが積もっている。まだ、厚さは1センチにもなっていないがそれでもこの雪が只の雪ではないと思ってもよい。

ふってからまだ1時間とちょっとなのだから。

>Time 1 5:3 4

「神咲一刀流...光刃波あっ！！」

式服の女性が手にした刀を一閃、その一閃から光の奔流が流れ出し、相手の巨人 ラガウリ=ウェンディゴをつらぬく。が、相手には全くもって無効化というわけではないものの、さして効いていない。

「はあ...はあ...」

式服の女性の側には似たような式服の女性が漂っている。あきらかに幽霊とっていいそれは側の女性に声を掛ける。

「薫...ここは退いたほうが懸命です。1人で立ち向かう必要は...」

「わかつとる！けど...相手がそれを許してくれるか...」

刀をもった式服の女性 名を神咲薫と言う は、救援要請をだしたチームを助ける為に目の前の相手に攻撃。一度は怯ませ、その間に重傷者の同僚が運びだしていった。それを確認した後、目の前の相手を片付けようと勝負に入ったのだが...全く歯が立たない。

いや、相手の動きはさして洗練されたものではなく、力の乗った一撃ではあるが素早さに目立ったものがないため、薫の技量をもってすれば対処できないような物ではない。それどころか相手の隙をついて攻撃することさえ、簡単にできる。

だが、どんなに攻撃しても全く傷つかない 否、傷はついているのにまったく倒れる気配はない。

そこで霊力を乗せた奥義を繰り出して行ったわけだが...結果は変わらなかった。

「なんという身体なんや...」

だが、ラガウリ=ウェンディゴも全く相手を捕らえられず苛立ち始めていた。

「ぐう...この身体でも、この程度なのか...」

「...しゃべった...！」

「ほう、しゃべるのがめずらしいか？」

「いままでまったく無言だったから、驚いた。それだけ。」

ラガウリは一歩進み、薫は一歩下がる。

「...こうなれば、こちらで対処するか...」

ラガウリはそういうと息を深く吸い込む。薫はそれだけで次に何がくるかを予測、その対処行動 地図である紙をひろげ、自分は大きく後に飛びのく を行なう。

ラガウリは息を吹いた。それはブリザードと同じ勢いのアイスブレス。

「くっ...！」

地図を盾にした上に大きく飛びのいた為に直撃は免れたものの、手足に刺すような痛みと痺れを感じる。

「...十六夜...」

「はい。」

刀がほんわかと光り、薫の側にいる幽霊が薫の手をさすり、脚をさする。

「...ほう。霊刀か。それも癒しの力を秘めた。」

ラガウリが感心する。

その隙を見逃さない薫。懐に手を忍ばせると針を投げる。

「!？」

ラガウリは腕でその針を受けるがその間に薫は角に飛び込む。ラガウリとの射線はさえぎられる。

「...ふん。逃げたか。」

ラガウリはそう呟くと、興味をなくしたようにきびすを返し、咆哮をあげる。その咆哮の一声で舞っている雪の量が増える。

「ふははは...吹雪け、この街を凍りつかせよ！」

その咆哮と嘲笑を背中に捕らえながら薫はその場を脱出した。

「はあ...恭也君から暗器の使い方を学んでおいてよかったよ...でも あれは格が違う。」

じっと手を見る。震えの収まらぬその手を。寒さによるものではない。

始めて十六夜を手にしたとき、あのときの久遠との戦い以上の戦慄。

「薫...」

「わかってる。」

そういうと薫は携帯に手を掛けた。危険な存在を周囲にしらせるために。うかつに手をださないようにと。

あと、一回だけ携帯で写真をとり、ある電話番号をおした。

> 15 : 42 / 国会議事堂

「風も雪も強くなってきたわね。」

鷺羽ちゃんは窓から外の様子をうかがう。議事堂内は空調による暖房が働いている。

閣議は今現在休憩に入っている。鷺羽ちゃんがいるのは外がみえる廊下だった。

「おや、鷺羽ちゃん。」

「加治ちゃん、トイレすんだみたいね。」

鷲羽ちゃんがそういったとき、美智恵が静かに姿を見せる。

「...あれ、どうかしたの？」

「首相、鷲羽博士。さきほど...今回の吹雪の原因と思える敵性体と戦ったという連絡がありました。」

「...倒せなかったのね？」

「はい。ただ、携帯から送られてきた外見から察するにウェンディゴやサスカッチというところから思われるのですが...」

美智恵の声には確信のようなものが無い。

「どうしたの？」

「その連絡者は私も名前は聞いたことがある実力者の1人なんですが...その彼女が全く歯が立たないような能力ではないのです。どちらにしても。」

「ふうん...。」

2人は黙考に入る。ここで加治首相が訊ねる。

「その、ウェンディゴというのは？」

だが、二人はそれには答えない。

「...美智恵さん。GS世界のウェンディゴでないとすれば、能力のほうは？」

「それは未知数とかいいようがありません。ですが、それ以上に私は彼女のほうは腕利きだと確信はできます。」

「つまり、連絡してきたGSはそれだけ有能と...」

「噂によれば、九尾の狐と互角に戦えるほどです。うちの令子ほどでないにしろ、相当な霊力と戦闘力をもった人物とみていいでしょう。」

「なるほど...けっして上位といえない、どちらかといえば、民間伝承の相手に負けるとは思えない、っと。」

そこまでのレベルとなると相手になるのは限られてくる。

「となれば、令子に頼もうかしら。」

「それが最善手、でしょうね。まあ、問題は...」

つぎの言葉は二人のみならず、加治首相もはもって呟く。

「依頼領よねえ（加治首相は「依頼領...」で止めている。）」

ため息をついたあと、美智恵はかつてしつたる自分の娘の事務所に連絡を入れる。

「どう？」

「留守みたいね。携帯はどうかしら？」

携帯にかけると今度は出た...が、美智恵の顔はあまり芳しいものではなかった。

「どうだったの？」

「令子、今...樺太で工作中。」

「最悪ね。流石に遠すぎるわ。」

一部の機体...SCABEI保有のブラックバードを始めとする超音速機...をつかえば1

時間かからずにとどり着くが、樺太と一口でいっても広い。とくに交通面においては不便なところも多いので超音速機が泊まれるような空港にとどり着くまでに1時間以上かかるということはザラである。そこまで時間がかかると今度は帝国華撃団が出撃可能になっている(筈)なのだ。

「仕方ないわね...こうなったら人間最終兵器に連絡をいれてみましょう。」

鷲羽ちゃんはそういうと携帯にその最終兵器の連絡先を入れる。

「...人間最終兵器...?」

「加治ちゃん、南雲慶一郎のことよ。」

加治首相はついこのあいだ会談を果たした青年を思い出す。そして、人の身でありながらASやベヒモス相手に徒手空拳で勝利したその実力も。

「繋がった...はーい、久しぶり~。南雲ちゃん、報道みた?」

鷲羽ちゃんは軽い口調で話し掛ける。

「そう、その悪魔騒ぎ。その中に首都圏にいまの雪を降らしてる首魁悪魔がいたんだけどね...これがなかなか手ごわくていまのところ打つ手無しなのよ。できれば協力してくれないかな?」

...相手の答えを聞いた鷲羽ちゃんは一瞬固まる。

「は...?なにそれ...? ちょ、ちょっとまちな」

電話が切られたらしい。

「...なんだったんですか?」

「美雪ちゃんが風邪ひいたみたいでそっち優先だって...」

3人はある意味、薄情な答えに呆然とする。まあ、南雲慶一郎という人物にとって如何なる手段を問わず守り通したい人物なのだから仕方ないといえば仕方ないのだが...

「それってあり...?」

美智恵の引きつった声に答えられるものはいなかった。

その後、加治首相は自衛隊の投入も考えるべきかと訊ねたが美智恵は首を横に振った。

「降魔関係の件を考えればあまり役に立たないどころか、無意味に被害が拡大する可能性があるわ。」

鷲羽ちゃんはその意見に対しやや首を傾げた。

「...鷲羽ちゃんは違うようですね。」

「まあ、経験者の言葉のほうがいいでしょうね。でも、自衛隊でもできることがあるでしょ?」

鷲羽ちゃんに加治首相はすこし笑った。自分もその必要性は感じ取っていたからだ。

帝国華撃団は時間不足、政府がもってる神秘学の中で高位の人物も出撃不可。そしてその後の閣議で避難勧告から避難命令に引き上げられる事になった。

閣議の再会を始めたときに対処にあたっていたGSに死者がでたためである。

16時丁度をもって帝都区および秋葉原に避難命令が発令。

そして東京管区气象台から、恐ろしい事態が進行しつつあることが告げられる。

気温、零下11度。ついに二桁にまで下がったのである。東京管区气象台は18時には零下20度を切る可能性を政府に示唆。神奈川、埼玉、千葉、茨城、山梨の5県に大雪注意報、そして東京都にはついに大雪、暴風警報が発令された。

そう、東京都にブリザードが吹いたのである。

天候の急速な悪化により新幹線も16時04分発、博多行きのみを最後に運転の欠航を決定。

つづく16時05分、在来線にも運転休止がつけられることになった。

さらに一部の施設では水道が止まる事態が発生。貯水タンクの出口が凍ることによるものであった。

16時25分。時の東京都知事は自衛隊に対し、災害出動を要請。

>Time 16 : 48

「ブリザードになってきたな。」

流石に防寒の魔法を使っているとはいえあまりの激変から人の居ない商店から防寒着を入手（お金はきちんと置いている）して悪魔退治を続行していた。

この天候の激変は活動していた悪魔達にも影響をあたえており、出会う相手の大半はすでに戦闘能力どころか行動能力さえ無くし、ただ、苦しみ...この場合寒さ...から解放する為、もしくは念のため...このあたりは行なうものの心遣いの差...とどめをさすという行なうだけになっていた。

だが、ごく一部の悪魔は元気である。

ジャックフロストとウェンディゴの二種。

とくにこの吹雪によってジャックフロストはかなりの強敵となりつつあった。

まず、傷を与えたとしてもすぐに直ってしまう、高速再生に加え、だんだん身体が大きくなっていったのである。

「...連絡がまた入りました。」

「こんどはどこだ...?」

「...05...神咲薫さんからですね。13番はすでに亡くなられたそうです。」

「そうか...これで残り何人になる?」

「22組中、3組。集まったほうがいいですね。」

19組、全員が全員悪魔にやられたわけではない。この天候の激変 とくに気温の大幅な低下 によって凍死をまぬがれるために離脱したものが多い。

「残り一組は?」

「ステイトさんと聖さんですね。」

「ああ、あの二人か...」

と、ここで巨大なジャックフロストが二人を奇襲しようとしたがあっというまに切り伏せられた上に炎上させられる。が、すぐに起き上がってくる。

「この珍妙な悪魔...時間が経つごとに巨大化していているな...」

甲斐那は一度、刀を鞘に収め、再び鯉口を切る。

「空裂断！」

気合一閃。黒い稲光を纏った闇が剣閃を延長し、ジャックフロストの首を刎ねる。その傷口に刹那の放った炎の蝶が纏わりつき、爆散する。

すでに3mをこえたジャックフロストは耐え切れず、雪になって風景へと溶け込んだ。

「...あとは何匹いる？」

「...わかりません。もう50は倒しているのですが...」

と。ここで式服の上にコートを羽織った女性 神咲薫が現れる。

「ああ、味方か。」

厳しい表情だった薫は一転して安堵の表情になる。

「君は大丈夫か？」

「はい。...でも、傷一つしていないなんてすごいですね。」

薫は式堂兄妹の衣服が全くといっていいほど傷ついていないことに歓心した。

「この程度の敵に傷つけられたら、知り合いに笑われますから...」

刹那が微笑む。帝都で分かれてからようやく同業者に会えたので緊張がゆるんだのだろう。

「...しかし...降り始めて僅かな時間で吹雪か。」

地面の雪が風に乗る...ブリザードも起こっている。

「さすがにこれはうちもまいりましたけど...帝劇で懐炉とコートを売ってましたからそれでどうにか、というところですね。」

「...緊急避難命令が出た、とか携帯で連絡が入っていたが...その帝劇にはまだ人が残っているのか？」

「はい。...なんか、政府の要請で残ってるそうですけど。」

「そうか...流石に一度暖を取りたい。帝劇に向かうか。刹那。」

「はい。」

「君は、どうする？」

「ここで分かれるのは、もう危険です。ついていきます。」

「すまないな。」

「いえ...正直うちも暖を取りたいとおもうんで...」

薫はすこし照れていた。

「そういえば、薫さんはあと一組の方々を見ましたか？」

刹那の問い。

「ああ、見ましたよ。軽度の凍傷を負ってましたので帝劇に向かうようにいっておきました。」

「そうですか。兄様、どうやら帝劇に向かえば残った全員と合流を果たせるようですね。」

「の、ようだな。」

>Time 17:01

「...おう、お疲れさん。」

帝劇のエントランスロビーには急遽置かれたらしい灯油ストーブが煌々と輝いていた。

...そう、彼らの目には映った。

ちなみに声をかけてきたのは壮年の男性である。

「オレは、ここの管理人の米田一基だ。よろしくな。」

酒瓶片手でGSたちを二階から見下ろしている。

「...しかし、めんこい美女が多いもんだな。」

米田の態度に薫はさすがに眉をしかめている。

「うちの管理人とは大違いです。」

そんな薫を米田は上から見下ろしながら、そばの藤枝姉妹に小声で話し掛ける。

「あれが、神咲一刀流の正統後継者、ってやつかい？」

「の、ようですね。データによればまだ高校生ですが。」

かえでが同様に小声でそっと答える。

「ところで大神機の再組み上げが終わったと。現在最終調整に入っています。」

「何時頃いける？」

「最低30分は欲しいと。」

「巴里のほうはどうでえ？」

「そちらはすでに組み上げは終わり、同様に最終調整にはいってます。正直な話、こちらは紅蘭がいないことが響いてます。」

「...専用機ってのも困りもんだよなあ...。」

米田は二階からじーっと、ストーブの前で、ホットコーヒーや緑茶を飲んでいる五人を見下ろす。

「あの、少年は大神と同じ二刀みたいだな。」

「凍傷で担ぎ込まれた、彼ですね。」

「ああ。僧衣の姉ちゃんにヒーリング受けて、もう大丈夫みたいだがよ。」

GS五人はひとつストーブにかたまり、円陣を組む。

と、ここでラジオから報道が入る。

『東京都管区气象台から、東京都の積雪が50cmをこえたとの情報が入りました...』

「...危険ですね。東京の建物はあまり積雪に対する配慮がなされてません。」

あやめの言葉に頷く米田。

『また現在の気温は零下15度にまで下がっています。』

「ここは冬の北海道だな。」

『また、大雪警報が午後5時を持ちまして、神奈川、埼玉にも発令されました。』

そのラジオを聞いて険しい顔になる円陣の面々。

「うちが戦った限りにおいて、あれほどの能力の魔は初めてです。」

薫のことばにステイトが訊ねる。

「それはあくまで耐久能力だけ、ということだな？」

「はい。確かにアイスブレスや冷却系の魔法の威力はなかなかのものでしたけど、それも耐えられない、というようなレベルではありません。」

「ふむ…。冷却系の防護さえ、しっかりしておけば恐れる事は無い、そうみていいな。」

「ですね。」

ここで、甲斐那が口を開く。

「薫君、ひとつ訊ねるが…その雪巨人の一人称は聞いているかね？」

「…確か、我、と偉そうでしたね。」

甲斐那がはあ、とため息をつく。

「…何か知ってるんですか？」

いままで聞き手にまわっていた聖が訊く。

「知ってる。というか、それはこちらの世界の悪だ…。」

「ラガウリ、という暗黒神が乗り移っているのです。」

刹那の言葉に3人の表情が曇る。

「つまり神族級の能力の持ち主、ということなのか？」

「そうなります。能力は全般的に上がるみたいですが…特に耐久能力については比類ない強化をみせます。」

ここでステイトが訊ねる。

「そういう、ということは一度は戦った事があるとみる。そのときはどう倒した？」

式堂兄妹はお互いの顔をあわせ、すこし首を捻る。

「あのときは餓鬼でしたよね…？」

「うむ。それに餓鬼の能力の低さを見限ったラガウリが身を引いたというのが一番正しい。」

二人の話をきいて流石のステイトも唸る。

「…打つ手なし、か？」

「ああ…そういえば。」

刹那が思い出したかのように声を上げる。

「身体の弱点までは補えないようでしたね。」

「…弱点、ね。」

「...雑魚の雪巨人は確か...炎に弱かったな。」

ステイトの声のあとに聖の声。

「それを狙うしかなさそうだな。」

しばしの沈黙のあとでステイトが声を発する。

「私は火炎の魔法を扱う事が出来る。ほかには？」

刹那が手を上げる。

「で、聖は炎の剣を持っている...と。決まりだな。一点荷重攻撃。あいての耐久力がある1点にだけおいて打ち抜く。命はそれで取れる。」

ステイトの言葉に...意味を知った上で残り4人は頷いた。

それぞれがもっていたカップを返すと一同は別に取り決めたわけでもなく、ひとつのパーティになって帝劇をあとにした。

「...GSの連中はなんか手を考えたみてえだな...」

「秘密にせざる終えない身分が口惜しいですか？」

「まあな。...最終調整は？」

「良好です。出撃可能な時間はあと10分！」

「戻った。」

イハビーラの声が研究室に届く。

ポニーテールの女性が一瞥する。

「おや、陽子君...君だけか？」

「寧々はちょっと今回の悪魔騒動の情報集めに奔走してる。」

「ああ、この吹雪か。まあ、もってあと1時間かな。」

陽子はその言葉にん、という顔になる。

「なにか知ってる？」

「ま、たぶん吹雪を起こしてる本人以上に。」

イハビーラはそういうと今回のからくりを述べた後に、そのからくりの裏側のことも告げる。

「...詐欺、じゃない？」

「うむ。詐欺だな。だが...これで暖めていた作戦ができるというものだよ。いくら秘密にしている、いや、秘密にしてるからこそ、咽喉から手がでるほど欲しいもの。それに届く機会が見えた。詐欺も働こうってものだよ。」

陽子の大きなため息。

「その作戦には」

「無論君にも出してもらおう。この作戦の重要なポイントは速攻だからな。」

このときのイハビーラの顔は悪女そのものであった。

つーいーにー。

出してしまいました。とら八からお1人、マイナーなところから二組。
後者のマイナーなところは重要な役どころを振るつもりなんですよねえ。

しかし...「SinsAbell」と「月陽炎」って、知ってる人何人いるんだろう...？